

科目名： 特別支援教育総論

担当教員： 笠井 新一郎(KASAI Sinichiro)

【授業の紹介】

特別支援教育の現状を知り、障害児・者の正しい理解と認識を深めるとともに、特別支援教育の本質及び目標と今日的課題について紹介する。

また、障害については、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病虚弱などの従来の障害に加えて、注意欠陥・多動性障害（ADHD）、自閉症スペクトラム障害（ASD）、学習障害（LD）などについても、保健・医学・福祉・教育・労働の観点から概要について解説する。

【到達目標】

1. 特別支援教育の現状を知り、障害児・者の正しい理解と認識を深めるとともに、特別支援教育の本質及び目標と今日的課題について理解できる。

2. 障害については、視覚障害、聴覚障害、知的障害、肢体不自由、病虚弱などの従来の障害に加えて、注意欠陥・多動性障害（ADHD）、自閉症スペクトラム障害（ASD）、学習障害（LD）などについても、保健・医学・福祉・教育・労働の観点から概要について理解できる。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 障害児とは（障害の定義）
- 第3回 障害と療育・教育
- 第4回 視覚障害児の理解と支援
- 第5回 聴覚障害児の理解と支援
- 第6回 知的障害児の理解と支援
- 第7回 肢体不自由児の理解と支援
- 第8回 病虚弱児の理解と支援
- 第9回 発達障害児（ADHD・ASD・LDなど）の理解と支援（1）
- 第10回 発達障害児（ADHD・ASD・LDなど）の理解と支援（2）
- 第11回 言語聴覚障害児の理解と支援
- 第12回 特別支援教育と関係機関（保健・医療・福祉・労働など）の連携（1）
- 第13回 特別支援教育と関係機関（保健・医療・福祉・労働など）の連携（2）
- 第14回 特別支援教育（幼児・児童・生徒）の現状と問題点（1）
- 第15回 特別支援教育（幼児・児童・生徒）の現状と問題点（2）

【授業時間外の学習】

この科目に対する復習・予習を確実に行うこと。必要に応じて、小テスト、ミニレポート課題を課すことがある。

【成績の評価】

提出物（毎回の講義に対する要点レポート15%）、ミニレポート（15%）、最終試験（70%）を総合的に評価する。レポートについては、その都度、結果を授業時に講評し、フィードバックを行う。

【使用テキスト】

拓殖 雅義、木船 憲幸著 『特別支援教育総論（改訂新版）』（放送大学教育振興会 2016年）

【参考文献】

湯浅 恭正編 『よくわかる特別支援教育』（ミネルヴァ書房 2008年）
安藤 隆男著 『特別支援教育基礎論（改訂新版）』（放送大学教育振興会 2016年）

科目名： 特別支援教育演習
担当教員： 藤井 明日香(FUJII Asuka)

【授業の紹介】

特別支援教育演習は、特別支援教育を必要とする幼児・児童・生徒の特徴やその支援の概要について学び、特別支援学校の授業形態や指導方法の実際を学ぶとともに、特別支援教育の指導形態に応じた学習指導の工夫について演習を通じて学びます。特別支援教育を必要としている教育現場において求められる知識及び実践力の基礎を培います。

【到達目標】

別支援教育の実践者として求められる基礎的知識の基盤形成及び実践的技能の基礎獲得を目指し、特別支援学校教育の実際に触れ、個々の教育的ニーズに応じた指導の実際について学ぶ。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 特別支援教育とICF
- 第3回 特別支援教育の現状と動向
- 第4回 知的障害児の教育の概要と特徴
- 第5回 肢体不自由児の教育の概要と特徴
- 第6回 視覚障害児の教育の概要と特徴
- 第7回 聴覚障害児の教育の概要と特徴
- 第8回 重度・重複障害児の教育の概要と特徴
- 第9回 発達障害児の教育の概要と特徴(1：ASD)
- 第10回 発達障害児の教育の概要と特徴(2：ADHD)
- 第11回 発達障害児の教育の概要と特徴(3：LD)
- 第12回 その他の障害児の教育の概要と特徴
- 第13回 特別支援教育と自立
- 第14回 特別支援教育と合理的配慮
- 第15回 重要ポイントの確認と整理

【授業時間外の学習】

各授業時間のテーマについて毎回レポートの提出を課します。資料や参考文献を用いて予習及び復習が必要になります。

【成績の評価】

受講態度、課題の提出状況などを総合して成績を評価します。

【使用テキスト】

特別支援教育総論，川合紀宗他著，北大路書房
その他必要に応じて、資料を配布します。

【参考文献】

必要に応じて、講義内で紹介します。

科目名： 知的障害児の心理

担当教員： 中塚 勝俊(NAKATSUKA Katsutoshi)

【授業の紹介】

知的障害のある子どもへの適切な教育的支援を実践するためには、その心理学的な特徴について理解を深めておくことは重要です。この授業では、知的障害とはどのようなことか、「知能」とは何かについて考えた上で、知的障害のある子どもの心理学的な特徴をふまえた教育的支援のあり方について考えていきます。

【到達目標】

保育所や幼稚園、特別支援学校などにおける知的障害のある子どもの心理学的な特徴を理解することにより、適切な教育的支援ができるための基礎基本を学び、知的障害の子どもを支える方策を考えることができる。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 知的障害の定義
- 第3回 知的障害の分類
- 第4回 知的障害のアセスメント
- 第5回 言語のアセスメント
- 第6回 社会生活のアセスメント
- 第7回 学習
- 第8回 言語獲得と社会的相互作用
- 第9回 行動調整機能
- 第10回 記憶の特徴
- 第11回 動機づけ
- 第12回 自閉症（高機能自閉症）
- 第13回 ダウン症
- 第14回 学習障害（LD）
- 第15回 注意欠陥多動性障害（ADHD）

【授業時間外の学習】

特に重要と思われる内容は、事前に予習の範囲を指定します。

【成績の評価】

成績の評価は、授業への参加度（15%）、ショート・レポート（15%）、期末試験（70%）の結果をもとに総合的に行います。

【使用テキスト】

なし

【参考文献】

新保育士養成講座編纂委員会（編）『子どもの保健』（全国社会福祉協議会、2012年）1900円

科目名： 知的障害児の生理・病理
担当教員： 宮崎 雅仁(MIYAZAKI Masahito)

【授業の紹介】

特別支援教育は障害を持つ子どもたちへの教育支援プログラムであるが、知的レベルに問題のある知的障害に加えて行動や情緒に障害のある発達障害に対する社会的認知度の高まりに伴い、それを専門とする教員への期待度・必要性が高まりつつある。それ故、その教育に関与する教員は子どもたちが持つ障害特性や病態生理を十分に理解し、科学的根拠の基に仁愛の念を持って対応する事が必要不可欠である。本講義では特別支援教育に必要な定型な子どもの成長・発達の知識から各障害の具体的な診断、治療、対処法までの内容を出来るだけわかり易く授業する予定である。

【到達目標】

1. 子どもの定型発達を正しく理解出来る。
2. 特別支援教育を必要とする子どもたちの障害特性を充分理解出来る。
3. その知識を生かして子どもたちの持つ表明的な症状だけでなく、その病態生理に基いた適切な対応が出来る。

【授業計画】

- 第1回 子どもの成長・発達
- 第2回 知的・発達障害概論（総論的内容）
- 第3回 発達障害各論（自閉症スペクトラム障害の病態生理）
- 第4回 発達障害各論（自閉症スペクトラム障害の診断・治療）
- 第5回 発達障害各論（注意欠陥/多動性障害の病態生理）
- 第6回 発達障害各論（注意欠陥/多動性障害の診断・治療）
- 第7回 発達障害各論（限局性学習障害の病態生理・診断・治療）
- 第8回 発達障害各論（発達性協調運動障害、トゥレット障害の病態生理・診断・治療）
- 第9回 中間習熟度チェック（質疑応答と意見交換）
- 第10回 知的障害各論（精神遅滞（脳性麻痺合併を含む））
- 第11回 知的障害各論（染色体異常）
- 第12回 知的障害各論（てんかんの病態生理・診断・治療）
- 第13回 知的障害各論（遺伝性・代謝性疾患の病態生理）
- 第14回 知的障害各論（遺伝性・代謝性疾患の診断・治療）
- 第15回 期末習熟度チェック（授業のまとめと質疑応答・意見交換）

【授業時間外の学習】

授業で使用したスライド原稿を各自が持ち帰り、講義内容の復習を行う。また、授業の最後に実施する小テストや中間習熟度チェックを受ける事により自らの到達度を絶えず把握する事が可能である。

【成績の評価】

毎回の講義の最後に実施する小テストの成績（15点）、中間習熟度チェック（5点）、期末試験（80点）の総合点により判定する。小テストの正答は当日解説し、学生自身が毎回理解度を確認する。

【使用テキスト】

宮崎雅仁・編：脳科学から学ぶ発達障害：小児プライマリケア/特別支援教育に携わる人のために（医学書院、2012年）本体3500円（税別）

【参考文献】

なし

科目名： 病弱児の心理・生理・病理
担当教員： 磯部 健一(ISOBE Kenichi)

【授業の紹介】

児童生徒の教育現場において、病弱児の心理、生理、病理を理解しておくことは非常に重要です。しかし、病弱児といっても個々の病気の種類や病態は千差万別です。それぞれの子どもに適切に対応することが必要とされています。本科目では病弱児の心理、生理、病理について医学・医療、心理の立場から多面的に映像的な資料としてスライドなどを使用して講義します。また、病弱児の主要な疾患についてグループ毎に発表を行い理解を深める授業にします。

【到達目標】

特別支援学校などにおける病弱児について、多様化、重度化しつつある病弱児の主要な疾患や病弱児の心理・生理・病理を理解することにより、病弱児に適切な指導、支援ができる教員としての資質を培うことを目指します。

【授業計画】

- 第1回 病弱・虚弱児の定義
- 第2回 小児の慢性疾患
- 第3回 病弱養護学校在籍児童生徒の主な病気、医教連携
- 第4回 小児喘息とストレス、自律神経
- 第5回 小児の腎疾患と病識、子どもの入院と心理変化
- 第6回 小児の心疾患
- 第7回 小児の血液・腫瘍疾患、母子分離入院と母子入院
- 第8回 小児の内分泌疾患、小児の生活習慣病
- 第9回 小児の神経疾患、小児の心身症
- 第10回 未熟児・新生児と障害、デベロップメンタル・ケア、愛着形成
- 第11回 先天異常、ドローターの心理変化、親の会
- 第12回 小児の感染症、感染予防とスタンダードプレコーション
- 第13回 QOL,医療とターミナルケア、緩和ケア
- 第14回 病弱・虚弱児の医療的ケア
- 第15回 これまでの講義のまとめと質疑応答

【授業時間外の学習】

各授業時に病弱・虚弱児に関係する事柄(前もって提示)について質問するので学習しておくこと。病弱・虚弱児の主要な疾患をグループ毎に割り当てるので、発表できるようにすること。

【成績の評価】

学習態度(10%)、レポート(20%)、期末試験(70%)の結果により総合的に判断します。定期試験の結果はオフィスアワーの際に解説する。

【使用テキスト】

使用しません。

【参考文献】

全国病弱養護学校長会編著『病弱教育Q&A PART1 改訂版』(ジヤース教育新社、2002年)
及川郁子監 伊藤龍子編『小児慢性特定疾患療育指導マニュアル』(診断と治療社、2006年)
独立行政法人 国立特別支援教育総合研究所著『特別支援教育の基礎・基本 新訂版』(ジヤース教育新社、2015年)

科目名： 肢体不自由児の心理・生理・病理

担当教員： 磯部 健一(ISOBE Kenichi),川田 人包(KAWATA Hitokane)

【授業の紹介】

この授業では、肢体不自由児の心理、生理、病理をそれぞれの観点から考えることとします。具体的には、(1)肢体不自由の概念を明らかにしたうえで、医学的な観点からは、人間行動の成り立ちと肢体不自由、身体のしくみとその生理と病理、肢体不自由の原因と主な起因疾患について、(2)心理学的な観点からは、肢体不自由と発達の関係、肢体不自由児の感覚・知覚、運動・動作、コミュニケーション、肢体不自由児への心理的支援について考えます。これらを通じて、肢体不自由児の教育にあたるための理論と実践力を身につけることを学びます。なお、授業は、生理・病理の領域を磯部が担当し、心理の領域を川田が担当して行います。

【到達目標】

特別支援学校などにおける肢体不自由児について、肢体不自由児の主要な疾患や肢体不自由児の心理・生理・病理を理解することにより、実践力を身につけ肢体不自由児に適切な支援ができる教員としての資質を培うことができる。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション・肢体不自由の概念(磯部)
- 第2回 人間行動の成り立ちと肢体不自由(子どもの正常運動発達)(磯部)
- 第3回 身体のしくみとその生理・病理(1)(磯部)
- 第4回 身体のしくみとその生理・病理(2)(磯部)
- 第5回 肢体不自由の原因と主な起因疾患(1)(未熟医療の進歩と脳性麻痺)(磯部)
- 第6回 肢体不自由の原因と主な起因疾患(2)(磯部)
- 第7回 肢体不自由の原因と主な起因疾患(3)(磯部)
- 第8回 肢体不自由と発達の関係(川田)
- 第9回 肢体不自由児の感覚・知覚(川田)
- 第10回 肢体不自由児の運動・動作(川田)
- 第11回 肢体不自由児のコミュニケーション(1)(川田)
- 第12回 肢体不自由児のコミュニケーション(2)(川田)
- 第13回 肢体不自由児への心理的支援(川田)
- 第14回 肢体不自由に係わる社会的・制度的課題(磯部)
- 第15回 講義のまとめと質疑応答

【授業時間外の学習】

受講者をグループに分けて、肢体不自由の原因となる主な疾患を割り当てるので、各グループは担当する疾患をレポートにまとめグループ毎に発表することとします。

【成績の評価】

授業参加状(10%)、レポート(20%)、期末試験(70%)の成績により総合的に判断します。グループ発表時に各疾患についての解説を行います。

【使用テキスト】

安藤隆男・藤田継道編著『よくわかる肢体不自由教育』(ミネルバ書房、2015年)(川田)
授業者が作成した資料を講義テキストとします(磯部)。

【参考文献】

篠田達明監修、沖 高司、岡川敏郎、土橋圭子編集『肢体不自由児の医療・療育・教育改訂3版』(金芳堂、2015年)
その他、授業のなかで、適宜紹介します。

科目名： 障害児の教育課程と指導法
担当教員： 笠井 新一郎(KASAI Sinichiro)

【授業の紹介】

特別支援教育の対象になる各種障害における教育課程について、特別支援学校、特別支援学級、通級学級ごとに基本的な事項を体系的に紹介するとともに、それらの具体的な支援法及び配慮項目についても紹介する。

【到達目標】

1. 各種障害における教育課程について、特別支援学校、特別支援学級、通級学級ごとに基本的な事項を体系的に理解し、それらの具体的な支援法について立案できることを目指す。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 特別支援教育の基本的な考え方
- 第3回 特別支援教育の学習指導要領
- 第4回 特別支援学校の教育課程の編成
- 第5回 特別支援学級の教育課程の編成
- 第6回 通級教室の教育課程の編成
- 第7回 視覚障害児の障害特性の理解と教育課程及び支援法
- 第8回 聴覚障害児の障害特性の理解と教育課程及び支援法
- 第9回 知的障害児の障害特性の理解と教育課程及び支援法
- 第10回 肢体不自由児の障害特性の理解と教育課程及び支援法
- 第11回 言語障害の障害特性の理解と教育課程及び支援法
- 第12回 情緒障害の障害特性の理解と教育課程及び支援法
- 第13回 学習障害児の障害特性の理解と教育課程及び支援法
- 第14回 注意欠陥・多動性障害児の障害特性の理解と教育課程及び支援法
- 第15回 自閉症スペクトラム障害児の障害特性の理解と教育課程及び支援法

【授業時間外の学習】

この科目に対する復習・予習を確実に行うこと。必要に応じて、小テスト、ミニレポート課題を課すことがある。

【成績の評価】

提出物（毎回の講義に対する要点レポート15%）、ミニレポート（15%）、最終試験（70%）を総合的に評価する。レポートについては、その都度、結果を授業時に講評し、フィードバックを行う。

【使用テキスト】

- 文部科学省 『特別支援学校学習指導要領解説 総則等編（幼稚部・小学部・中学部）』（教育出版2016年）
- 文部科学省 『特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編（幼稚部・小学部・中学部・高等部）』（海文堂出版 2016年）
- 文部科学省 『特別支援学校 幼稚部教育要領、小学部・中学部学習指導要領、高等部学習指導要領』（海文堂出版 2016年）

【参考文献】

必要に応じて適宜紹介する。

科目名： 特別支援教育指導法研究
担当教員： 藤井 明日香(FUJII Asuka)

【授業の紹介】

特別支援学校における教育実習に向けて、特別支援学校の授業形態や指導方法の実際を学ぶとともに、大学において習得した知識や技能を基盤として、特別支援教育の指導形態に応じた学習指導の工夫について演習を通じて学びます。特別支援教育実習において求められる実践力の基礎を培います。

【到達目標】

特別支援教育の実践者として求められる基礎的知識や技能の基盤形成及び実践的技能の習得を目指し、特別支援学校教育の実際に触れ、それぞれの学部で用いられている学習指導案を研究することで、学習指導案を作成に求められる基礎的な技能を習得する。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 特別支援教育における教育実習のねらい
- 第3回 特別支援学校(知的障害)の概要と特徴
- 第4回 特別支援学校(肢体不自由)の概要と特徴
- 第5回 特別支援学校(病弱)の概要と特徴
- 第6回 特別支援学校教育の実際(1)(特別支援学校の訪問)
- 第7回 特別支援学校教育の実際(2)(特別支援学校の訪問)
- 第8回 特別支援学校教育の実際(3)(特別支援学校の訪問)
- 第9回 特別支援学校教育の実際(4)(特別支援学校の訪問)
- 第10回 特別支援教育指導法研究(教育課程と学習指導案)
- 第11回 特別支援教育指導法研究(幼稚部の学習指導案)
- 第12回 特別支援教育指導法研究(小学部の学習指導案)
- 第13回 特別支援教育指導法研究(中学部の学習指導案)
- 第14回 特別支援教育指導法研究(高等部の学習指導案)
- 第15回 重要ポイントの確認と整理

【授業時間外の学習】

これまで講義や演習で学んだこととともに、指導案の作成や教材研究など自宅学習の時間確保が必要です。また特別支援学校の授業参観やボランティア活動に積極的に参加して、実践力の基盤形成に努めることが大切です。

【成績の評価】

受講態度、レポートなどを総合して成績を評価します。

【使用テキスト】

必要に応じて、資料を配布します。

【参考文献】

必要に応じて、講義内で紹介します。

科目名： 知的障害児教育

担当教員： 笠井 新一郎(KASAI Sinichiro)

【授業の紹介】

知的障害のある子どもの基本的知識および発達特徴を紹介する。さらに知的障害児の教育の教育課程の特徴を理解し、学習指導要領に基づいた各支援法及び配慮項目について紹介する。

【到達目標】

1. 知的障害のある子どもの基本的知識および発達特徴を理解する。
2. 知的障害児の教育の教育課程の特徴を理解し、学習指導要領に基づいた各支援法及び配慮項目に熟知でき、使用できることを目指す。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 知的障害の定義(DSM- とDSM-5の比較)
- 第3回 知的障害の原因および合併症
- 第4回 知的障害の発達特徴(ダウン症を含む)(1)
- 第5回 知的障害の発達特徴(ダウン症を含む)(2)
- 第6回 知的障害の総合的検査・評価(臨床的評価、客観的評価)
- 第7回 知的障害の全般的な支援及び配慮項目(1)
- 第8回 知的障害の全般的な支援及び配慮項目(2)
- 第9回 支援法及び配慮項目(日常生活・遊びの支援)
- 第10回 支援法及び配慮項目(生活単元学習)
- 第11回 支援法及び配慮項目(国語)
- 第12回 支援法及び配慮項目(算数)
- 第13回 支援法及び配慮項目(自立活動・作業学習・職場実習)
- 第14回 支援法及び配慮項目(交流・共同学習)
- 第15回 まとめ

【授業時間外の学習】

この科目に対する復習・予習を確実に行うこと。必要に応じて、小テスト、ミニレポート課題を課すことがある。

【成績の評価】

提出物(毎回の講義に対する要点レポート15%)、ミニレポート(15%)、最終試験(70%)を総合的に評価する。レポートについては、その都度、結果を授業時に講評し、フィードバックを行う。

【使用テキスト】

太田 俊巳、藤原 義博著 『知的障害教育総論』(放送大学教育振興会 2016年)

【参考文献】

小池 敏英、北島 善夫著 『知的障害の心理学 - 発達支援からの理解』(北大路書房 2001年)

科目名： 知的障害児教育演習
担当教員： 笠井 新一郎(KASAI Sinichiro)

【授業の紹介】

特別支援教育を行っていくためには、的確な検査・評価を実施することで、正しい障害像が得られる。特に、さまざまな障害を真に理解するためには、臨床的な評価とともに、客観的な評価を実施し、総合的な評価が必要になる。知的障害を通して、的確な検査・評価（臨床的評価、客観的評価）の意義、重要性について紹介する。

【到達目標】

1. 特別支援教育において、的確な検査・評価（臨床的評価、客観的評価）の意義、重要性について、理解する。
2. 各種検査（発達、知能、言語発達、その他）について、各検査の特性について理解し、検査が実施できるよつになることを目指す。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 的確な検査・評価の重要性（1）
- 第3回 的確な検査・評価の重要性（2）
- 第4回 発達検査の概要の紹介
- 第5回 発達検査の実習
- 第6回 検査結果の指導計画への活用方法
- 第7回 知能検査の概要の紹介
- 第8回 知能検査の実習
- 第9回 検査結果の指導計画への活用方法
- 第10回 言語発達検査の概要の紹介
- 第11回 言語発達検査の実習
- 第12回 検査結果の指導計画への活用方法
- 第13回 その他の検査の概要の紹介
- 第14回 その他の検査の概要の実習
- 第15回 検査結果の支援計画への活用方法

【授業時間外の学習】

この科目に対する復習・予習を確実に行うこと。必要に応じて、小テスト、ミニレポート課題を課すことがある。

【成績の評価】

提出物（毎回の講義に対する要点レポート15%）、ミニレポート（15%）、最終試験（70%）を総合的に評価する。レポートについては、その都度、結果を授業時に講評し、フィードバックを行う。

【使用テキスト】

- 上野一彦・他著 『日本版WISC- による発達障害のアセスメント』（日本文化化科学社 2016年）
- 上野一彦・他著 『特別支援教育の理論と実践 概論・アセスメント』（金剛出版 2013年）

【参考文献】

- 尾崎康子・他編著 『知っておきたい 発達障害のアセスメント』（ミネルヴァ書房 2016年）
- 尾崎康子・他編著 『知っておきたい 発達障害の療育』（ミネルヴァ書房 2016年）

科目名： 病弱児教育

担当教員： 笠井 新一郎(KASAI Sinichiro)

【授業の紹介】

病弱児の心理・生理及び病理について理解しておくことは重要である。病弱児の抱える障害について、原因、特徴、リハビリテーションなどについて述べるとともに、障害の理解、それらをかかえて生きている子どもの理解、その子どもと共に生きる家族、地域の人々との関係性についても述べる。

【到達目標】

1. 病弱児の心理・生理及び病理について理解する。
2. その障害について、医学、リハビリテーション、教育のそれぞれの立場から理解する。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 病弱・身体虚弱の概念と歴史
- 第3回 子どもの主な疾患、障害特徴および配慮事項の実際（神経疾患）
- 第4回 子どもの主な疾患、障害特徴および配慮事項の実際（神経疾患）
- 第5回 子どもの主な疾患、障害特徴および配慮事項の実際（循環器）
- 第6回 子どもの主な疾患、障害特徴および配慮事項の実際（呼吸器）
- 第7回 子どもの主な疾患、障害特徴および配慮事項の実際（消化器）
- 第8回 子どもの主な疾患、障害特徴および配慮事項の実際（内分泌・代謝）
- 第9回 子どもの主な疾患、障害特徴および配慮事項の実際（腎・泌尿器）
- 第10回 子どもの主な疾患、障害特徴および配慮事項の実際（腫瘍）
- 第11回 子どもの主な疾患、障害特徴および配慮事項の実際（その他）
- 第12回 特別支援教育の学習要領を踏まえた病弱教育
- 第13回 保護者支援の重要性
- 第14回 児童・生徒への指導・助言と地域との連携
- 第15回 まとめ

【授業時間外の学習】

この科目に対する復習・予習を確実に行うこと。必要に応じて、小テスト、ミニレポート課題を課すことがある。

【成績の評価】

提出物（毎回の講義に対する要点レポート15%）、ミニレポート（15%）、最終試験（70%）を総合的に評価する。レポートについては、その都度、結果を授業時に講評し、フィードバックを行う。

【使用テキスト】

- 小野次郎、西牧謙吾、榊原洋一著 『特別支援教育に生かす 病弱児の生理・病理・心理』（ミネルヴァ書房 2011年）
- 横田雅史監修 全国病弱養護学校校長会編著 『病弱教育Q & A・PART - 病弱教育の道標 - 』（シアーズ教育新社 2002年）

【参考文献】

- 西間三馨、横田雅史監修 全国病弱養護学校校長会編著 『病弱教育Q & A・PART - 病弱教育の視点からの医学事典』（シアーズ教育新社 2003年）

科目名： 病弱児教育演習

担当教員： 笠井 新一郎(KASAI Sinichiro)

【授業の紹介】

病気の子どもへの教育的支援をするためには、その病気について心理・生理・病理を理解し、適切に対応することが必要である。そのためには、その病気について、正確に理解する必要があるため、自分でさまざまな手段を使って、調べて、まとめて発表し、討論することを行う。

【到達目標】

1. さまざまな病気について心理・生理・病理を理解できる。
2. 支援事例について、調べて、まとめて発表することができることを目指す。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 病弱教育の意義
- 第3回 病気の子どもへの教育的支援（実践編）
- 第4回 病気の子どもへの教育的支援（制度編）
- 第5回 支援事例の具体的検討（1）支援事例の概要
- 第6回 支援事例の具体的検討（1）発表・検討会
- 第7回 支援事例の具体的検討（1）報告書作成
- 第8回 支援事例の具体的検討（2）支援事例の概要
- 第9回 支援事例の具体的検討（2）発表・検討会
- 第10回 支援事例の具体的検討（2）報告書作成
- 第11回 支援事例の具体的検討（3）支援事例の概要
- 第12回 支援事例の具体的検討（3）発表・検討会
- 第13回 支援事例の具体的検討（3）報告書作成
- 第14回 個々の子どもへの支援の共通点と相違点
- 第15回 まとめ

【授業時間外の学習】

この科目に対する復習・予習を確実にすること。必要に応じて、小テスト、ミニレポート課題を課すことがある。

【成績の評価】

提出物（毎回の講義に対する要点レポート15%）、ミニレポート（15%）、最終試験（70%）を総合的に評価する。レポートについては、その都度、結果を授業時に講評し、フィードバックを行う。

【使用テキスト】

- 横田雅史監修 全国病弱養護学校校長会編著 『病弱教育Q & A・PART - 新しい就学基準「自立活動」の事例「総合的な学習の時間」の事例 - 』（シアーズ教育新社 2002年）
- 横田雅史監修 全国病弱養護学校校長会編著 『病弱教育Q & A・PART - 教科等指導 - 』（シアーズ教育新社 2004年）
- 横田雅史監修 全国病弱養護学校校長会編著 『病弱教育Q & A・PART - 院内学級編 - 』（シアーズ教育新社 2004年）

【参考文献】

必要に応じて適宜紹介する。

科目名： 肢体不自由児教育

担当教員： 川田 人包(KAWATA Hi tokane)

【授業の紹介】

「肢体不自由児教育」は、肢体不自由児の教育や療育についての基礎・基本を学び、障害の多様な肢体不自由児に適切に対応するために設けられた科目です。

本講義では、インクルーシブ教育システム化において、他の障害種の組み合わせを含め重度・重複・多様化した幼児・児童・生徒一人ひとりに対して、アセスメントに基づく適切な指導と必要な支援のあり方について検討します。また、共体験（ボディワーク）等を通して肢体不自由児の心と身体に対する理解を深めると共に、社会モデルに基づく環境づくりを学びます。

【到達目標】

肢体不自由児の正しい理解に努め、望ましい指導や支援の基本的な学びを通し、一人ひとりに向けた効果的な指導法や環境づくり、教材教具の活用や開発の仕方等を習得します。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 肢体不自由児の教育 - 歴史と現状 -
- 第3回 特別支援学校や特別支援学級における教育の実際
- 第4回 肢体不自由児の運動発達と課題
- 第5回 脳性まひ児等の肢体不自由疾患による特性
- 第6回 肢体不自由児の心理発達
- 第7回 教育課程編成の基本と授業づくり（P D C Aサイクル）
- 第8回 自立活動と個別の指導計画
- 第9回 身体の動きの指導や支援
- 第10回 コミュニケーションの指導や支援
- 第11回 各教科の指導と自立活動との関連
- 第12回 重度・重複障害児の指導や支援 - 医療的ケアについて -
- 第13回 教材教具を活用した発達支援 - 福祉機器等 -
- 第14回 肢体不自由児のキャリア教育
- 第15回 新たな取組と今後の課題 - 権利擁護の視点 -

【授業時間外の学習】

履修する学生には、前時の復習と次時の復習を求めます。また、復習を兼ねたレポートや感想文の提出を求められることがあります。

【成績の評価】

受講態度(30%)、提出物(30%)、筆記試験(40%)を総合して成績を評価します。

【使用テキスト】

「よくわかる肢体不自由教育」安藤隆男・藤田継道編著 ミネルヴァ書房 2,500 + 税

【参考文献】

必要に応じて、講義内で紹介します。

科目名： 肢体不自由児教育演習
担当教員： 藤井 明日香(FUJII Asuka)

【授業の紹介】

「肢体不自由」のある児童生徒の教育には、それらの障害特性に応じて効果的な教示の仕方や環境設定が求められます。本講義では、「肢体不自由」の理解とその特性を学び、肢体不自由教育に関する諸課題に対して、自らテーマ設定を行い、文献や実地による調査等を行いレポートとしてまとめ発表します。これらの演習を通して、肢体不自由児教育に関する理解を深めます。

【到達目標】

自ら選択した肢体不自由児教育に関する課題の文献研究や調査研究、現場見学等の実地研究を通して、肢体不自由児教育の抱えている課題や今後の方向性について探求し、肢体不自由児教育に携わる教員としての資質の向上を目指します。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 研究テーマ検討と決定（課題探索）
- 第3回 研究テーマの検討と決定（テーマ決定）
- 第4回 参考文献・先行研究の整理（文献検索）
- 第5回 参考文献・先行研究の整理（文献検索）
- 第6回 参考文献・先行研究の整理（文献検索）
- 第7回 肢体不自由児教育課題研究（課題整理）
- 第8回 肢体不自由児教育課題研究（発表）
- 第9回 肢体不自由児教育課題研究（発表）
- 第10回 肢体不自由児教育課題研究（課題整理）
- 第11回 肢体不自由児教育課題研究（発表）
- 第12回 研究成果の発表
- 第13回 研究成果の討議
- 第14回 研究成果の確認と整理
- 第15回 肢体不自由教育の研究動向の確認と整理

【授業時間外の学習】

履修する学生には、書籍やインターネットやテレビなどから情報収集し、問題意識を高める姿勢を求めます。また、自宅での資料の整理や発表資料の作成が必要です。

【成績の評価】

演習への参加態度、発表内容及び発表資料を総合して成績を評価します。

【使用テキスト】

必要に応じて指定します。

【参考文献】

必要に応じて、講義内で紹介します。

科目名： 視覚の発達と障害

担当教員： 惠羅 修吉(ERA Shukichi)

【授業の紹介】

目が見える人にとって、目の見えない人が経験する世界を想像することはとても難しいことです。目が見えている私たちは、「見える」ということを子どものときから当たり前のこととして経験してきました。当たり前のように存在している「見え」の世界。しかしながら、私たちは経験としては気づいていませんが、「見え」の世界は子どもから大人になるについて少しずつ変化しているのです。この授業では、「見え」の発達について、いろいろな事例や研究を通して基礎的な知識を提供することをめざします。さらに、目が見えない、あるいは目が見えにくいといった視覚障害について解説します。私の専門は心理学なので、視覚の発達と障害について、特に心理学的なトピックを取り上げて紹介したいと思います。

なお、本授業は「特別支援学校教諭免許」に必要な科目です。視覚障害のある子どもの理解と教育に必要な情報について授業のなかでしっかりと提供します。

【到達目標】

本講義では、視覚の発達に関する基礎的知見の獲得と子どもの視覚障害に関する理解を促すことを目標とします。特に、視機能に関連した困難を有する子どもの教育に必要な知識を正しく理解することをめざします。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 視覚の構造1：眼から脳まで
- 第3回 視覚の構造2：高次脳機能
- 第4回 視覚障害の定義と分類
- 第5回 視覚検査1：視力検査
- 第6回 視覚検査2：眼位検査
- 第7回 視覚検査3：色覚検査 他
- 第8回 視覚検査3と中間試験
- 第9回 視覚障害児の心理学的特性1：聴覚認知
- 第10回 視覚障害児の心理学的特性2：触運知覚
- 第11回 視覚障害児の心理学的特性3：空間認知
- 第12回 視覚障害児の心理学的特性4：音声言語の発達
- 第13回 視覚障害児の心理学的特性5：視覚言語（点字を含む）の発達
- 第14回 視覚障害に対応した支援機器の活用
- 第15回 視覚障害児教育の歴史：授業のまとめ

【授業時間外の学習】

授業中に文献を配布いたしますので、それらを必ず読むこと。また、参考図書やホームページをいくつか紹介しますので、それらを閲覧してください。

【成績の評価】

評価は、期末レポート（40%）と授業中の小レポート（20%）、試験（40%）とします。

【使用テキスト】

ありません。

【参考文献】

- 香川邦生・千田耕基(編)『小・中学校における視力の弱い子どもの学習支援』(教育出版, 2009年)
- 香川邦生(編)『四訂版 視覚障害教育に携わる方のために』(慶應義塾大学出版会, 2010年)

科目名： 聴覚障害教育総論

担当教員： 谷本 忠明(TANIMOTO Tadaaki)

【授業の紹介】

人は生まれて1年ほどでことばを話すようになりますが、その過程では聴覚が大きな役割を果たしています。しかし、私たちは、普段の生活の中で、聴覚の働きや特徴について意識することは余りありません。聞こえる子どもの場合、生後数年の間にことばは急速な変化を遂げ、小学校に入学する頃には書きことばも身につけ、話しことばとともに学習活動を支える重要な手段となります。また、ことばは、お互いの意思の伝達手段としても重要です。他方、聴覚障害教育の対象となる幼児児童生徒の多くは、乳児期から聞こえに障害があります。そのため、ことばの獲得の様相は、聞こえる子どもとは異なる面があります。初期の段階では、周囲の人との関わりも大切にしながら、ことばを身につける指導をしていく必要があります。そのため、聴覚障害幼児児童生徒に関わる教師は、どのような環境がことばの獲得にとって望ましいのかを意識し、環境を整えていくことが求められます。近年は、インクルーシブ教育の考えの広がりとともに、聴覚障害幼児児童生徒が学ぶ場も多様になっています。彼らの学習を確実に行うための手立てについても、教師は考え、準備していく必要があります。本授業は、特別支援学校教諭免許状取得に関わる聴覚障害教育に関する授業で、免許状取得に必要となる「心理・生理・病理」に関する内容、「教育課程・指導法」に関する内容を扱います。

【到達目標】

わが国における特別支援教育は、平成26年の「障害者の権利条約」の発効まで様々な取り組みが進められてきました。また、現在、次期学習指導要領の改訂に向けた作業も進められており、今後、インクルーシブ教育の視点に立った教育が展開されようとしています。しかし、聴覚障害教育に求められるものはこれまでと大きく変わるものではありません。本授業では、わが国の現状を踏まえながら、聴覚障害幼児児童生徒に関わるうえで必要となる、聞こえの仕組みとその障害、聞こえを補う手段、聞こえの障害がもたらす発達上の特徴、聴覚障害教育の制度や歴史、現状、教育課程や指導内容の概要、今後の課題について、基礎的知識の獲得や理解を深めることを目標とします。

【授業計画】

- 第1回 聴覚障害教育を巡る近年の動向と聴覚障害教育の現状
- 第2回 音の基礎と聞こえの仕組み・話す仕組み
- 第3回 聴覚障害の原因と特徴、聴覚補償機器、コミュニケーション手段
- 第4回 聴覚障害児童のことばの特徴
- 第5回 聴覚障害教育を支える制度と教育課程・教育場面
- 第6回 聴覚障害教育の歴史とことばの指導を巡る考え方
- 第7回 聴覚障害教育における教科と自立活動の指導
- 第8回 これからの聴覚障害教育に求められるもの

【授業時間外の学習】

聴覚障害教育に関する領域では、多くの用語が使用されたり、幅広い内容について扱われたりします。その多くは、初めて聞く内容かと思います。しかも、集中講義という、一度に多くのことを学習する形となりますので、配付した資料や説明内容について、授業時間内、時間外でノートに整理し、構造化を図るようにしてください。

【成績の評価】

本授業の評価は、講義終了後に続けて実施する最終試験の結果と受講態度とを総合して行います。そのため、集中講義ではあっても、毎時間、出席をとります。その結果、出席時間数が規準に満たない場合には、最終試験を受けることはできません。6割以上の得点を評価対象とし、規準に従って段階評価を行います。

【使用テキスト】

ありません。必要な資料を授業のはじめに配布し、それによって進めます。

【参考文献】

- 伊藤壽一・中川隆之著『難聴Q & A』（ミネルヴァ書房、2005年）
木島照夫・菅原仙子・岡野敦子（編著）『難聴児はどんなことで困るのか？』（難聴児支援教材研究会、2011年）
文部科学省著『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説』（海文堂出版、2009年）他
白井一夫・小網輝夫・佐藤弥生編著『難聴児・生徒理解ハンドブック』（学苑社、2009年）
脇中起余子著『聴覚障害教育これまでとこれから』『「9歳の壁」を越えるために』（北大路書房、2009年、2013年）

科目名： 重複障害教育総論
担当教員： 落合 俊郎(OCHIAI Toshiro)

【授業の紹介】

重複障害児教育の歴史をさかのぼり、ヘレン・ケラーに始まる盲ろう二重障害の教育方法を学び、点字、手話、発話へとどのように教育するのか学習します。その後、養護学校義務制実施以降、知的障害、肢体不自由、病弱をあわせもつ重複障害の子どもが多くなりました。このような児童生徒に対して、どのような授業を組むのか、学習指導要領ではどのように言及しているか説明します。また、特別支援学校の中で彼らに対してどのような授業を組むのか学習します。吸引、経管栄養等の医療的ケアが必要な子どもたちへの対応も学びます。国連障害者の権利条約批准後、重複障害のある子どもたちの合理的配慮をどのようにするのか説明します。

【到達目標】

重複障害のある児童生徒の心理・生理・病理的な特徴と、特別支援学校重複学級の中では、どのような授業が行われるか理解すると同時に、医療的ケアが必要な児童生徒の対応に関する知識を含め、特別支援学校教諭に必要な総合的な知識を身につけます。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション。
- 第2回 重複障害の定義について。
- 第3回 重複障害教育の歴史をさかのぼって：盲ろう二重障害児の教育とはどのようなものか紹介します。
- 第4回 NHK「ETVスペシャル あなたと話したい」から学ぶもの：重度の知的障害・肢体不自由・病弱を併せもつ児童生徒の教育とは何か紹介します。
- 第5回 個別の教育計画、個別の指導計画、合理的配慮とはなにか、具体的な内容について学びます。
- 第6回 自立活動について(学習指導要領解説から)：授業案を作成するときのポイント、行動の見方について学びます。
- 第7回 重複障害のある児童生徒の教育課程：特別支援学校重複障害学級の中での授業を紹介します。
- 第8回 医療的ケアが必要な子どもたちへの対応についての説明と授業の振り返りを行います。

【授業時間外の学習】

重複障害のある児童生徒は肢体不自由特別支援学校や病弱特別支援学校に在籍していることが多いので、ボランティアや介護等体験等でこれらの子どもたちと親しむことを勧めます。

【成績の評価】

授業の参加状況(20%)と試験(80%)の結果により総合的に評価します。

【使用テキスト】

志村大喜彌『重度・重複障害児の教育 盲ろう児の指導実践に学ぶ-』(コレール社,1989),2000円。
文部科学省 特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編(幼稚部・小学部・中学部・高等部)(海文堂出版,2004),200円。

【参考文献】

なし

科目名： LD等教育総論

担当教員： 井上 とも子(INOUE Tomoko)

【授業の紹介】

発達障害、主にLD・ADHD・高機能自閉症スペクトラム障害の様態に応じて必要となる支援、特に教育的支援について学びます。はじめに、発達障害の定義について、教育的支援の方向性を示す形で解説します。教育的支援を組み立てるために、まず、アセスメントについて話を進める中で、標準化された発達検査についても触れます。次にそれぞれの学習上の特性に応じた指導・支援方法を論じた後、昨今、通常の学級で困っているとされる問題行動に関する、対応方法と共に説明します。
最後に発達障害児を持つ保護者の障害受容と教育相談のポイントについて述べます。

【到達目標】

幼児期と小学校期の発達障害の様態を理解し、起こす行動の意味を知り、特性と行動の意味にあった支援・指導の方法を知り、通常の学級における特別支援教育のあり方全般の知識を身につけることができる。

【授業計画】

- 第1回 オリエンテーション（授業の進め方・学習の仕方等・発達障害の概要）
- 第2回 特別支援教育への転換と今、求められる支援の方向性（障害者差別解消法を踏まえて）
- 第3回 アセスメントの重要性と支援のPDCAサイクル
- 第4回 各種発達検査と検査から分かること
- 第5回 学習障害について
- 第6回 学習障害と注意欠如多動性障害について
- 第7回 注意欠如多動性障害と問題行動の意味
- 第8回 問題行動の理解と対応（応用行動分析学と対応方法を含む）
- 第9回 自閉症スペクトラム障害（中でも高機能に焦点を当てて）の特性
- 第10回 自閉症スペクトラム障害の教育について
- 第11回 発達障害と社会性の課題
- 第12回 通常の学級の中の発達障害児と周囲の子ども達との関係
- 第13回 通常の学級における指導・支援（学級運営を含む）
- 第14回 発達障害児を持つ保護者の障害受容と苦悩
- 第15回 まとめ（これまでの講義にかかる質問・応答、課題に応じたレポート作成と発表）

【授業時間外の学習】

授業計画に沿って進めます。事前に参考文献に目を通し、疑問点等を持って授業に望む事を期待しています。

【成績の評価】

レポート70% 授業中の質問・発言20% 授業態度10%
成績評価の不明な点についての質問には、十分な説明を行います。

【使用テキスト】

なし

【参考文献】

- 小島道生・宇野宏幸・井澤信三編著『発達障害の子がいるクラスの授業・学級経営の工夫』明時図書（2008）
- 小野次郎・上野一彦・藤田継道編『よく分かる発達障害』第2版ミネルヴァ書房（2010）
- 日本LD学会編『発達障害事典』（2016）

科目名： 特別支援教育実習（事前事後指導を含む）

担当教員： 藤井 明日香(FUJII Asuka),高橋 伸子(TAKAHASHI Nobuko)

【授業の紹介】

本授業は、「教育実習」・「教育実習」及び「特別支援教育指導法研究」を受講しており、特別支援学校教諭免許状（知的障害者・肢体不自由者・病弱者）を取得する学生を対象としています。一定期間特別支援学校において、指導教員の指導を受けながら特別支援学校の実際について体験し学びます。

併せて、教育実習を円滑に、より効果的にその目的を達成させるために、実習の前後に講義・演習を行います。特別支援教育実習の概要や実習の心得等の理解を深め、課題をもって実習に取り組めるようにしていきます。

【到達目標】

- 1、特別支援教育の実践者として求められる専門性を理解し、必要な知識を習得することができる。
- 2、子どもの実態把握、指導計画の作成・実践・記録・評価を通して、基本的な指導技術を習得することができる。

【授業計画】

事前指導

- ・教育実習の意義、目的、内容等について
- ・特別支援学校の実態、幼児児童生徒の理解
- ・特別支援学校の教育課程、指導の実際
- ・学習指導案の作成
- ・模擬授業の実施と反省
- ・実習の事前準備と心得及び直前指導(日誌等の書き方、挨拶、自己紹介等)

特別支援教育実習(2週間)

- ・実習校の概要
- ・幼児児童生徒の理解
- ・授業参観と授業参加
- ・実地授業の準備と実施
- ・研究授業の準備と実施
- ・研究授業の反省会

事後指導

- ・実習内容のまとめと反省
- ・実習成果の報告書作成
- ・特別支援教育実習報告会と実習評価

【授業時間外の学習】

事前・事後指導における資料作成、教育実習中の学習指導案の作成、実習日誌の記入などかなりの自主学習の時間が必要となります。また、事前に特別支援学校の授業参観やボランティア活動に積極的に参加して、障害理解に努めてください。

【成績の評価】

事前・事後学習の活動状況（40%）、実習（40%）、報告会での発表（20%）を総合的に評価して、単位を認定します。

【使用テキスト】

本学作成『特別支援教育実習の手引き』

【参考文献】

授業の中で、必要に応じて紹介します。